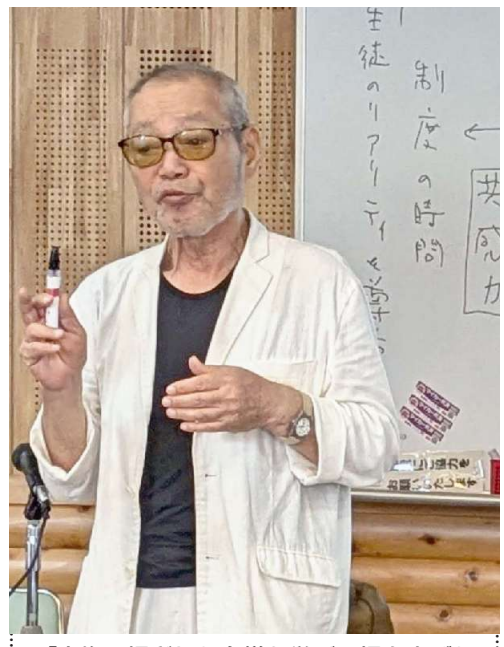
北と南から新しい学校を

インタビュー

フリースクールと高等専修学校がある「珊瑚舎スコーレ」（沖縄県南城市）の代表を務める星野人史さん。昨年は、沖縄県の認可を受けて全国初の私立夜間中学校を開校しました。さらに北海道にも新しい学校（札幌市）を作る準備をすすめています。学校づくりへ寄せる思いを聞きました。



「人権に根ざした多様な学びの場を広げたい」と星野さん。神奈川県内の講演＆懇談会で（今年６月）

学校法人雙星舎理事長／
モシリナァスコーレ設立準備会長
星野人史さん

人に生まれたので、人をまっとうしたい。それが僕が学校をつくっている理由です。

人は「自分を創る」生きものです。その手助けをするのが学校です。

僕にもいろんな可能性がありましたが、一番面白いなと思ったのは教員で、55年しています。今も授業をしていますが、授業が一番楽しいです。

授業とは、教材を介して、生徒が思索し、教員が思索し、その中身を伝え、交流して、新しいものを手に入れていく場です。子どもが10人いれば十通りの変容の道筋があります。これを可能にするにはクラスの規模をできるだけ小さくする必要があり、珊瑚舎は一クラス10人以下です。

自分で作った学校は、この先も本質を見失わずいてほしいと思っています。珊瑚舎の基本的な考え方は、「個の尊重」と「協同の調和」です。一見矛盾するこのことを、今、学校で追求していくことがすごく大事だと思っています。

加えて、僕が求めているのは、自分が自由であること、自立的であること。そして平和に暮らすことです。でもこれは、押し付けることではなく、生徒たちが体験の中で発見してほしいというお願いみたいなものです。

今年開校25年となり、今、北海道にも学校を作ろうと思っています。日本が、沖縄で、北海道で、少数民族に対して、差別抑圧を国をあげて行ったことをなかったことにしてはいけないとの思いがあります。校名は、アイヌ語の「モシリ」（大地）と沖縄の言葉「ナァ」（庭）を合わせた「モシリナァスコーレ」です。アイヌ語とアイヌ文化を教えるカリキュラムもつくり、多様な知性や感性に触れ、子どもたちと学んでいきたい。

学ぶとは、人をまっとうすることはどういうことか等を、全国の皆さんと交流したい。三人集まればどこへでも行きます。

※問合せ　☎098（975）7781か「珊瑚舎スコーレ」で検索しHPを参照

北海道の学校の完成予想図
提供：学校法人雙星舎（寄付金募集中）

ずいそう

現代美術作家として仕事をしながら、6歳の息子を育てています。多くの働くお母さん同様、時間に追われる毎日です。

特に子どもが生まれてしばらくは作品制作どころではなく、頭の中に「滅私奉公」という文字がよぎりました。ちょうどその当時、ある芸術祭に呼んでいただき、授乳室用のテントを制作することになりました。私自身授乳中だったので必要性を感じ、会場内のインフラとして設置することになったのですが、果たしてそれを「作品」としてしまったら、「見られる」ものになってしまい、安心して使用できないのではないか？という問題にぶつかりました。結果、作者としての自分の名前は会場には掲示せず、ただの授乳室として使ってもらうことにしました。ほとんどのお客さんが作品だとは認識していなかったと思います。

安全性を優先した選択でしたが、しばらくたってからふと、初めての育児で感じた〝自分が消えていくような焦燥感〟を、自分の名前を消すということで表現したかったのかもしれない、と思うようになりました。同時に、同様にケア労働に携わっている人は世の中にごまんといるのに、なんて自分は自意識が強くて利己的なのだろう、とも気付かされました。表現を仕事にしている人間は、多かれ少なかれそういう性質を持っているのかもしれませんが。だからこそ、社会になんらかの形で還元できる作品を作りたい、作らなければならないな、とより強く考えるようになりました。

自分が消えていくような焦燥感

碓井ゆい（現代美術作家）

※唯井ゆいホームページ　https://yuiusui.com/

代田知子さんおすすめの子どもの本　大人もぜひ！

講談社　1600円＋税

チャリを盗んで、夜明け
黒川裕子　作
（中学生～）

金の星社　1400円＋税

先生！おかわり禁止ってへんじゃない？
麻生かづこ　作
イシヤマアズサ　絵
（小学校中学年～）

BL出版　1600円＋税

朗読詩　ひろしまの子
四國五郎　詩
長谷川義史　絵
（小学校中学年～）

鮮烈な１冊『**チャリを盗んで、夜明け**』から。ケガで失業した父と暮らす中３の巧海は生活費が足りず、年上の友人と深夜に自転車を盗む「バイト」をしている。「バイト」帰りのある朝、巧海は小型トラックに積まれたピアノと、おっさんに出会い、そこから世界が変わっていく。「貧困」「闇バイト」を当事者の目線でとらえ、彼らの背景や揺れ動く心の内をリズム感のある文章で的確に描く。物語には手を差し伸べる大人がいた。現実は？　と考えずにいられない。

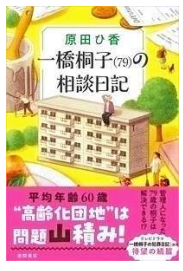
『**先生！おかわり禁止ってへんじゃない？**』の舞台は、４年１組の教室。学校には、「お誕生日会禁止」などの決まりがたくさんある。ある日忘れ物をした春斗が、「忘れ物をしたら給食のおかわり禁止」という決まりはへんだ！と発言すると、決まりが多すぎると思っていた子どもたちが校則を調べ、ついに学級会で話し合うことに…。既存の決まりでも疑問を持ったら声を上げ、調べてみんなで話し合う。彼らは生き生きと民主主義を学んでいる。これぞ日本の学校教育に必要なことだ！と嬉しくなった。

最後の『**朗読詩　ひろしまの子**』は、詩や絵で反戦平和の活動に取り組んだ四國五郎氏が、1980年８月６日にヒロシマで行われた原水爆禁止世界大会のために作り、１万人の前で読まれた朗読詩を絵本にしたもの。登場するのは、被爆前の子どもたちの笑顔。「戦争は絶対にしてはいけない」という思いが、絵本だからこそ強く届く。

BOOK

一橋桐子（79）の相談日記

原田ひ香



徳間書店　1750円＋税

NHKでドラマ化された『一橋桐子（76）の犯罪日記』の続編。前作では、家も失い刑務所に入りたいと願っていた桐子が、今作では孫のような雪菜と二人、老朽団地の管理人になって大活躍する。保険証も、家族も、お金もない！と、高齢化する団地は問題山積。年金者組合の埼玉支部長も登場し、住民の問題を一つひとつ解決していく。住民たちが心を開いていくさまにほっこりし、制度や法律について知ることができるのも魅力。

「わが子が不登校」という問い

母として教師として

坂本則子

新日本出版社　1700円＋税

わが子（姉と弟）の不登校と向き合った中学校教師が、その貴重な経験を踏まえ、教師としての再生を果たしていく記録。苦悩する過程でのカウンセリングの役割の大きさ、同じ立場で語り合った親たち。職場に復帰してからの「教育相談部長」（不登校加配）としての実践、なかでも「新転任の先生方へ」という9項目のアドバイスからは、子育てのヒントをもらえる。復帰し、出会った子どもたち、教師と学校の今を問い直す。

編集部から

1面のオーラルフレイル。小組や班会に出かけておしゃべりする新婦人の会員には縁遠い話かも？　チェック表を家族や友人で話題にしてみては。口をたくさん動かし、心身を健やかに保ちたい。（玲）